

天眼鏡

風土や地域資源を活かしての生業

10 月下旬、私と家内の喜寿祝いの旅ということで、娘の企画・案内により 3 人で紀伊半島を車で一周してきた。熊野の古代の空気に触れたい、というのが一番の目的であったが、車を走らせながら農業現場をのぞいたり、地域の実情等について話を聞きながらの旅となった。

和歌山の農業現場ということで足を運んだのが、世界農業遺産でもあるみなべ・田辺の梅システムである。ルートの関係でまずは紀州備長炭発見館を目指し、ここでみなべ町うめ振興館等の、話を聞ける場所についての情報をもらう予定が、開館している時期が梅の花や実があるときに限られるとかで、話を聞くことは断念。それであればとにかく梅林を見てみようということで紀州石神田辺梅林に車を走らせた。そこそこの傾斜地に広がる梅林を想像していたが、予想は完全に裏切られた。山を抜けて見通しの広がるところに出たと思ったら、それが大変な急傾斜地で、傾斜地の上にウバメガシの林があり、その下に梅林が広がる。這っていくのかと思うほどの急傾斜で、ここで上り下りしながら作業をすることを思うと、高所恐怖症の筆者にはとても耐えられそうにない。そうした急斜面で栽培された南高梅を収穫して梅干しや梅酒等に加工し、さらに急峻なところにあるウバメガシを切り出して備長炭を作るが、いずれも特産品という以上に逸品として知られ、農家経済を支える。まさにこの地形を逆手に取り、気候・風土を生かして地域循環システムを作り上げ、持続的な農業を創造してきたもので、その知恵と工夫、努力には頭が下がるばかりだ。

またその前日になるが熊野の奥に足を運んだ。折よくある山村で昼食をとることができ、そこで地元の人たちに地域の実情等について話を伺うことができた。話をしているうちに、某さんから、先般、大事に育ててきた牛を屠畜場に運んで肉にしてもらい、その肉をみんなで分かち合って食べたという話が出た。牛耕をさせたいと思って購入した牛が、牛耕の練習をずいぶ

んとやったものの、牛耕はきらいなようで、ちっとも働いてくれない。耕せないなら、子牛を生んでもらうしかないが、それもなかなか種がつかず、別の子牛を買うしかなくなってしまった。しかしながら餌の調達からして、2 頭を飼う余裕はないことから、やむなく処分したということらしい。

実はこの某さんの話を聞いて、ハッとさせられた。某さんの牛を見る目、牛との距離は自分とは違う。某さんは牛との関係性を体で感じながら毎日を暮らしており、その牛の死も、屠畜されて肉となったものを食することも、丸ごと受け入れているようだ。言い換えれば生業として向き合うすべてのものの一つとして牛を位置づけており、牛はまさに家畜、一緒に生活するものの一つとして、その生と死を共にし、死がもたらした肉をありがたく、おいしくいただいている、というように受け止めた。

これは生業として牛を飼っているもので、現代ではこれを畜産とは呼ばないかもしれないが、山の傾斜地を利用して放牧したり、牛耕をさせたり、また糞尿は堆肥として活用したりもしている。まさに一昔前の農村・山村を思い起こさせるが、大規模化した畜産だけでなく、こうした小規模での家畜の飼養は、農山村にとって貴重なものであり、食の供給源でもあることを、あらためて実感させられた。

最近、各地で熊が出没し自衛隊や警察官が出動したりと大騒ぎとなっているが、山野に手が入らなくなって木の実が減少したり、耕作を放棄したところに草が生い茂って、隠れ場が増えていることも一因とされる。何より農山村の担い手の減少が大きいのが、こうした小規模な、生業の家畜を活用して、地形や風土を生かし、地域循環を取り戻していくことも大切であり、求められてもいるのではないかと。

(農的社会デザイン研究所 代表 蔦谷栄一)